

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】倉本知明

【所属】(助成決定時)立命館大学先端総合学術研究科

【研究題目】 「戦争」経験の比較文学研究―日・台戦後文学における「戦争」表象を中心に―

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、戦後台湾における二つの「戦争」文学の流れを整理して上で、主に日本の戦争に動員された台湾人元日本兵(台湾人志願兵)たちを取り扱った文学作品を戦後日本における「戦争」文学と比較する事によって、戦後両国の中で「戦争」がどのように表象されてきたのかを考察する事にある。

戦後台湾には大きく分けて二つの「戦争」経験が存在した。その一つは共産党との内戦に破れ、大陸から台湾へと撤退してきた国民党政府とその兵士たちが経験した「戦争」であり、もう一つは植民地時代に日本軍の兵士・軍属として南洋戦線に動員された台湾人元日本兵たちが経験した「戦争」である。本研究ではこうした二つの対立する「戦争」経験が、戦後の台湾文学において如何に並行して(あるいは交わり合うことなく)描かれてきたのかを整理した上で、両国の戦後文学における「戦争」表象を比較するものである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

敗戦後、軍国主義的検閲制度から解放された日本の作家たちの多くが、かつて描くことの出来なかった自らの戦争経験を語ることによって戦後文学の端緒を切り開いた事とは対照的に、日本の植民地から「解放」された戦後台湾社会において、台湾人元日本兵たちが経験した戦争は長らく公の場で語られる事がなかった。そうした中でも、とりわけ戦場におけるセクシャリティに関しては、戦後日本文学における饒舌さと台湾における禁欲さはまさに対照的であった。もちろん、1980年代まで続いた戦後台湾文学におけるこうしたある種の禁欲さが、東アジアにおける冷戦構造が旧植民地地域に強い準戦時体制によって生まれた結果であったことは間違いない。本研究では、こうした饒舌と禁欲の中で立ち現われてきた両国の戦争文学において描かれてきた兵隊たちのセクシャリティといったものが、如何に軍事主義的なジェンダー・アイデンティティによって規定され、また彼らの身体をそれに見合ったものへと変化させていったのかに着目した。こうした問題を明らかにするために注目したのが、両国における「慰安婦」をめぐる表象の相違である。なぜなら、二つの戦争文学に描かれた「慰安婦」とその肉体を欲望する兵隊との関係は一見似ているようでありながら、実はそのポジショナリティによって微妙な差異を見せているからだ。そうした差異を詳しく読み解くために、本研究では田村泰次郎と陳千武という二人の元日本兵が描いた戦争文学を比較した。田村泰次郎と陳千武は、ともに「慰安婦」を積極的にテキスト内部に描き込むことによって「迫真性」に富んだ戦場の実態を赤裸々に描き出してきた作家であったが、両者の「迫真性」の内実を詳細に比較することによって、以上に述べたような戦場におけるセクシャリティと身体との関係性を明らかにした。こうした手続きを踏むことによって、本研究では両国の戦後文学においていったい何が語られ、また語られ得なかったのかを考察した。

【結論・考察】(400字程度)

田村泰次郎が戦後「肉体文学」作家として、戦場におけるこうしたセクシャリティを描いたこととは対照的に、全く違った戦後を生きた陳千武が皮肉にも同様のテーマにこだわり続けたのは、「慰安婦」に象徴される女性たちの存在が、かつて植民地出身の「志願兵」であった作家自身のポジショナリティと重なり合わないまでも、近いものがあったせいであった。国民党による独裁政権によって幕を開けた台湾の「戦後」を「新しい戦争状態」と捉えていた陳千武にとって、こうした戦場におけるセクシャリティは、数少ない従軍経験を持った台湾人元日本兵としての貴重な体験談であると同時に、同時代への痛烈な寓話としても機能していた。その意味から、軍隊における兵隊たちの「慰安婦」に対する欲望を赤裸々に語った田村泰次郎の作品が、皇軍という組織におけるホモソーシャルな絆といったものを可視化させるものであったとすれば、被植民者の視点から戦場における性の多様性を捉え直した陳千武の作品には、従来の日本の戦争文学では描き得なかったセクシャリティの在り方が示されていたと同時に、両国の辿った「戦後」が如何なるものであったかを示すものとしても読むことも出来る。

